

難波西鶴と 海の道

【20】

森田 雅也

庄内藩代高力忠兵衛と西回り航路の話。この場合は「郡代」という役職は、庄内藩の農村支配役人の責任者だと思えます。

庄内米は、明石米、近江米などとともに江戸時代を通じて好まれた、日本でも有数のブランド米でしたから、売りさばるべきよう藩を豊かにします。

を増やそうとしたのでしよう。熟考の上、大坂回米の航路として、西回り航路を選び、藩論を導いたのです。にもかかわらず、西回り航路をほんの7、8年で旧来の敦賀・琵琶湖ルートに復したのですから、高力忠兵衛の苦労は水の泡です。

その理由を『酒田市史改訂版・上巻』（昭和62年）は「天和元年になって利害得失につき疑問を持つようになった」としますが、む

西鶴の生涯と重なる？

しろ、旧来の敦賀・琵琶湖ルートの業者とのしがらみが働いたのではないかと推測します。

さて、西鶴の『好色一代男』巻七の五の話は「三月三十日の日帳」です。陰暦では、1カ月の日数が異なり、29日が小の月、30日が大の月と呼ばれました。

庄内藩が西回り航路を採用していた延宝元年より『好色一代男』刊行の天和2年までの間で、「三月」が「三十日」あるのは、延宝元・2・3・4・5・6年、天和2年しかありません（『新刊古暦便覧大金坤』より）。

『好色一代男』は年立てという方法で書かれていますが、全54章は、第1章の7歳から最終章の60歳まで、1歳につき、1章ずつで構成されています。最終章の女護の嶋へ向かって旅立つ話は、『好色一代男』刊行の天和2（1682）年の話となっています。

『好色一代男』の作品構成を単なる趣向とせず、まともに信じてば、巻七の五は53歳の話ですから、延宝3（1675）年での話となります。延宝3年の「三月」は大の月ですから、『好色一代男』と題しても正しく、庄内藩の西回り航路採用時期とも重なり、計算

上はぴったりと合うのです。巻七の五を延宝3年の話として読むとどうなるのでしょうか。

延宝3年の西鶴は、4月に妻を失い、追善のために独吟千句を行ってしまいます。巻七の五では遠く海を隔てた酒田の地で大坂の恋人を思っていると、世之介の前にその彼女の面影があらわれるという情感あふれる話となっています。

そう考えると相通じるところがあるように読めますね。こんな楽しみ方もありかもしれません。

（関西学院大学文学部文学言語学科教授）

「1章1歳」構成の好色一代男